



「ざんねんな万葉集」

岡本梨奈(著)/
雪路凹子(イラスト)
飛鳥新社
1091円(税別)

先輩経理ウーマンが
褒める
お気に入りの

この1冊
オススメ

Book

皆さんもおなじみの方葉集。日本最古の和歌集で、4500首以上の和歌が収められています。この万葉集には、自分の高い人の歌だけではなく、一般庶民や遊女・乞食といった最下層の人たちの歌も収められています。そのため高貴な人の優雅でさわやかな歌だけではなく、庶民の「身勝手でイタイ歌」もあつたりします。本書はそうした「ざんねんな歌」にスポットライトを当てたものです。たとえばこんな歌。「愛しと 我が思ふ妹は はやも死なぬか 生けりとも 我に寄るべしと 人の言はなくに」(作者未詳(男))。「妹」は男性から見て親しい女性を呼ぶ語「ぬか」はこうあればいいなあという願望の言葉。ということ現代訳をすると、「美しいと私が思う愛しいあの娘、早く死なないかなあ。生きているとしても私になびいてくれそうにないの」。自分になびい

てくれそうにないので死ねなんて、まるでストーリーカーですよね(笑)。もう一首。「山守の ありける知らにその山に 標結ひ立てて 結ひの恥しつ(天伴坂上郎女)。「山守」は奥さんのこと。「その山」は男性。「標結ひ立てて」は自分のものにしてしようとして、のたとえ。現代訳では「あなたがまさか既婚者でいることを知らずに、アタックして恥をかいってしまったわ」という歌になります。既婚者であることを隠して合コンに参加した男にだまされた…といったところでしようか。ほかにも「付き合ってくれなれば死ぬ」とか「妻と旅行しても君のことを想っているよ」とか、身勝手にイタイ歌が51首紹介されています。万葉集が編纂されたのは1300年前。その頃から男と女は、嫉妬したり嘘をついたり相手を騙したりして生きてきたのですね(笑)。(きよ美)